

「Textbook of Gastroenterology」2nd ed

edited by Tadataka Yamada, David H. Alpers, Chung Owyang,
Don W. Powell, Fred E. Silverstein

神戸大学教授・老年医学

千葉 勉

本教科書は、消化器病学の中では、最もユニークで新しいタイプの教科書である。

本を開いてまず目につくのは、図表や絵が極めて多く、理解しやすい工夫がなされている点で、このことは画像以外の図表が少なかった従来の教科書とは大きく異なっている。

更にもう1つの特徴として、各Chapterの引用文献が極めて多いことが挙げられる。実際900近い文献が引かれているChapterもあるほどで、このことは、本教科書の内容が多く文献の事実や考察に深く根ざしていることを裏付けるものである。

しかしながら本書の最も素晴らしいところは、何といっても分子生物学、細胞生物学や生理学の知識が随所に取り入れられている点で、消化器病学をこうした基礎医学の視点から理解していこうとする新しい考え方が色濃く現れている。

本書は、① Basic mechanisms of normal and abnormal gastrointestinal function, ② Approaches to

common gastrointestinal problems, ③ Gastrointestinal diseases, ④ Diagnostic and therapeutic modalities in gastroenterology の4つのPartから成り立っているが、特にPart 1には600頁が割かれており、分子式や分子構造、細胞や神経支配の図、更には消化管運動のレコーディングの図などがふんだんに使われていて、バラバラとめくっただけでも、いかにも楽しそうである。また文献についても1990年代のものが数多く引用されており、*Helicobacter pylori*や癌遺伝子、癌抑制遺伝子などの最新の知見にも事欠かない。各Chapterをみると、Part 1は特に充実しているが、motility, immune system, secretion, nutritionなどのChapterは圧巻である。またPart 3の各論についても、gastritis, duodenitisのChapterは、*Helicobacter pylori*感染を考慮した極めて興味深い考え方が示されているし、大腸疾患についても、炎症性腸疾患から腫瘍性病変に至るまで、病因から臨床まで、最新の知識で貫

かれている。更にmotility disorderなどの機能性疾患については、従来のどの教科書よりも格段に理論的で優れている。

近年の分子生物学を中心とした基礎医学の進歩は目覚ましく、消化器病学においても、癌は言うに及ばず、アカラシアやヒルシュスプルング病などの原因遺伝子が次々と明らかにされつつある。こうした現況において、本書は時代の流れを先取りした世界で最も新しい“消化器病学の教科書”と言えるであろう。ヒスタミン H_2 受容体遺伝子をクローニングした編者のT. Yamadaの面目躍如といったところである。

なお本書には胆道疾患は含まれているが、純粋なhepatologyは除外されている。それだけに膵胆管系を含む消化管についての記載はより充実したものとなっている。

● Published by JB Lippincott Co, Philadelphia. in 2 vols. 3,216 pp. 1,400 figs. 1995 定価 38,770 円 (税込)